

茅葺き屋根を描ける物語を作りたい

絵本作家 飯野和好

囲炉裏端は大人の社交場

ぼくは、秩父の農家で生まれました。戦国時代から続く山間部の小ぶりな半酪半農の家です。明治生まれの祖父が家の中のことや行事を全部仕切っていた。竈や囲炉裏の火を絶やさず、竈には竈の神さま、囲炉裏には囲炉裏の神さま、外には氏神さまがいて、必ずお正月やお盆には、水やお餅をあげていました。そういう暮らしが当たり前にあったのです。

幼い頃、家の囲炉裏に大人が集い、話しているのを聞くのが楽しみでした。土間があつ



て、上がり框がまに囲炉裏があり、隣近所のおばさんやおじさん、葉売りや、家に来た人が、そこへ座ってちよつと話してお茶を飲んで帰っていく。奥まで行かないんですよ。寄る方も気楽だし、迎える方も構えずに済む。気軽に誰でも立ち寄って、漬物をつまんで今年の漬物のできはどうか、あそこの家では何があつたとか、そろそろ種まきの時期だとか情報交換をして、長居しないで帰るんです。そして、農作業が終わると、またそこでお茶を飲む。大人たちの汗のにおいと畑のにおい、そんないろんなものが混ざつたにおいが

好きだったなあ。囲炉裏端は、なかなかいい場所でしたね。

また、家が養蚕もやっていたので、夏になるとお蚕さんのために全部二階を開け放ちていました。ぼくもよく手伝われました。夜なべ仕事も。子どもには子どもができる範囲でちゃんと仕事があつた。勉強なんかは二の次。それが今は一番の宝物のように残っています。

いつも活気に溢れた家で、鶏やら牛、豚の声までにぎやかで、生きものがみんな一緒に

飯野和好 (いの・かずよし)

1947年埼玉県秩父生まれ。絵本作家・イラストレーター。『小さなズナ姫』(偕成社1996)シリーズで第11回赤い鳥さし絵賞、『ねぎぼうずのあさたろう その1』(福音館書店1999)で第49回小学館児童出版文化賞を受賞。全国各地で講演、本読み、ワークショップも活躍。



生きていくという感じでした。そんなにお金があつたわけではないけれど、とても豊かな気持ちで、安心していられた。あんな暮らしができたのは幸せだつたと思います。

里山で暮らした経験を絵本で伝えたい

ちよつとぼくらの世代は団塊の世代と言われ、時代の移り変わりを生きてきているんです。

ぼくの周りでも同級生が、もう農家はやらないと町に出て行つたし、きれいな里山にも工場ができてしまつた。「あんな山の奥を買つ

てくれる」と喜んで売つたら、山を削つてゴルフ場ができて沢の水が飲めなくなつてしまつた。石清水いしのみずのとてもいい水なんですよ。

時代の流れの中で失われていくものがあることに気付くまで、便利な方へ流されていってしまう。やつと最近になって、これは何かおかしいと気付き、昔の暮らしはよかつた、そういえばこんなこともあつたとか、あんなこともしたとか思い出してきたのではないのでしょうか。でも、それを覚えていた人がだんだんいなくなつてきてしまふ。だから、今の年配の人はなんでもいいからどんどんしゃべつて残していく必要があると思います。

ぼくは、絵を描くときにも適当に描けない。背景にある茶店にしても、縁台があつて、まんじゅうを出すところがあり、お湯を沸かしたり、うどんも作らなきゃならない。そうすると店の裏に、いろんなものを置く。店先から裏までを行き来できる裏戸も必要。だから絵本にもそれを描き入れて、見る人にも楽しんでもらい、子どもにも茶店つてこうなっているんだと思つてもらえる。倒れた草の向きや泥道、畦道のちよつとした部分に里芋が植えてあつたり、農家で育つた経験からわかる細部を描くことで臨場感を伝えたい。かつて暮らしていた里山の風景をそのまま描いていることが自分でも嬉しい。僕らの原点ですから。今の子どもたち、大人たちが体験していない昔のことを絵本で追体験し、伝えていくことが大事だと思います。

絵本は自由自在でどの時代にも行けるけれど、ぼくはどうしても民家が出てくる時代が好きなんです。茅葺き屋根が描けるような物語を作りたい。

あんなきれいな建物はなからね。